

リンカーン伝記作家としての内ヶ崎作三郎

— 忘れられた文化史家の国際感覚と政治姿勢について —

陶 徳 民

Uchigasaki Sakusaburo as a Biographer of Abraham Lincoln: The Forgotten Cultural Historian's Global Awareness and Political Stance

TAO De-min

An open-minded Protestant, educator and statesman, Uchigasaki Sakusaburo (1877-1947) obtained a deep knowledge about Anglo-American cultures during his time in England as a college student and at Waseda University as a teacher of Western civilizations. He played a role as a progressive opinion leader along with his fellow-provincial Yoshino Sakuzo in the Taisho period. Through an analysis of the first edition and the revised version of his biography of Abraham Lincoln, published in 1919 and 1929, respectively, the present paper attempts to look into his comparative views on the Civil War and the Great War, on the Civil war, the Meiji Restoration, the Taiping Rebellion and the Unifications of Germany and Italy, and on the constitutional theories and movements in the United States, Meiji Japan, and the early Republic of China. In addition, the paper further reveals his religious faith as a Unitarian believer and his political stance as a middle -of-the-roader, which led to his parting with Yoshino in 1924.

キーワード：内ヶ崎作三郎 (Uchigasaki Sakusaburo)、吉野作造 (Yoshino Sakuzo)、リンカーン (Abraham Lincoln)、文化史家 (cultural historian)、国際感覚 (global awareness)、政治姿勢 (Political stance)

吉野作造（1878-1933）より一歳上の同郷、大正期と昭和初期で活躍した内ヶ崎作三郎（1877-1947）はいまや、ほとんど忘れ去れている。戦後五十年間の唯一の研究論文「人間と文化——『六合雑誌』における内ヶ崎作三郎」（1988年）を撰した故竹中正夫（1925-2008）同志社大学教授によれば、内ヶ崎は次のような豊富な経験の持ち主であった。宮城県出身の教育者であり、早稲田大学教授をつとめたのち、1924年以降は代議士当選七回、民政党総務、文部政務次官などをつとめ、1941年には衆議院副議長に選ばれた。もともと仙台の第二高等学校で学び、キリスト教に触発され、東京帝大文科大学に進んで英文学を専攻し、早稲田大学では文明史および文化史を講ずるなど、きわめて幅ひろい教育を身につけていた。さらに、1908年から三年にわたって渡欧し、主として英国オックスフォード大学（後述するように、正しくはオックスフォード地域のマンチェスター学院—陶）で西洋の近代思想、キリスト教思想について学ぶとともに、ヨーロッパ各地をつぶさに訪問して、キリスト教文化についての視野を広めかつ深めていった。仙台時代にバプテスト系の宣教師ブゼル女史の聖書研究会に吉野作造、小山東助などと共に出席し、吉野と共に受洗した。東京に出て、東大基督教青年会の寮に入り、キリスト教を中心にした共同生活によって培われるとともに、海老名弾正の牧する本郷教会に出席し啓発されるどころが少なくなかった。英国留学後は、ユニテリアンのグループである統一教会（1912年1月成立）の指導者となり、同時に『六合雑誌』の編集にも与り、1911年から1920年にわたっては、ほとんど毎号のように健筆をふるい、その該博な知識と豊かな文化的教養や信仰論をもって賑わした¹⁾。

竹中論文が発表されたほぼ二十年後、内ヶ崎の義理のお孫さんにあたる小野寺宏氏が既刊の『愛天内ヶ崎作三郎資料』数冊をベースに、『内ヶ崎作三郎の足跡をたどる』（2007年）という千頁を超える伝記資料集をまとめた。その「はしがき」と「あとがき」により、不確かな部分もあるが、内ヶ崎の生涯にまつわるいくつかの面白いエピソードを知ることができる。たとえば、小学校高等科二年の時に半年で三年に進級したため、吉野より東京帝大へ一年早く入学できたこと、帝大では三年間小泉八雲の教えを受けたこと、在学中に西本願寺の高僧島地黙雷の次男島地雷夢と親交を結んで浸礼教会で受洗をして、吉野の受洗を誘発し海老名弾正の主宰する『新人』の寄稿家になったこと、地元では吉野と小山とともに「宮城県の大正デモクラシーの三羽がらす」と呼ばれたこと、『新人』や『六合雑誌』以外に『帝国文学』、『憲政』や『民政』などにも多数寄稿していたこと、そして昭和20年4月のアメリカ軍の空襲で住居と蔵書20万冊が焼

1) 竹中正夫「人間と文化——『六合雑誌』における内ヶ崎作三郎」、『キリスト教社会問題研究』第31号、1983年3月。竹中自身は京都大学経済学部卒業、イエール大学神学部博士号取得、1955年-1998年同志社大学に務めていた。

かれ、遺物はほとんど無なかったことなどである²⁾。

内ヶ崎に関する研究の僅少に関する小野寺氏の慨嘆にもかかわらず、彼を主な考察対象とする直近二十年間の研究は管見の限り、渡辺勝幸氏「西洋文明と日本的価値観の邂逅：キリスト教徒内ヶ崎作三郎の明治天皇崩御観」（慶應義塾大学『政治学研究』第29号、1999年）と白山映子氏「内ヶ崎作三郎の英国観——『英国より祖国へ』を素材として」（『思想史研究』第11号、2010年）という二本しかなかったようである。

確かに、内ヶ崎は教育者、政治家、宗教家、文筆家など、いくつかの顔をもっている。しかし、その著述の全体像および諸活動に関する所信表明から見て、彼を二十世紀前半日本の代表的文化史家の一人と見てよいのではないかと考えている。このことについては、内ヶ崎が次のような多くの単行書（主として早稲田大学在職中の著述で、中には改版や増補の二種類が含まれる。書名中の旧漢字はあえて改めないことで、書物出版された当時の文化と雰囲気を読者に伝えたい。以下の引用文も同様）を出していることから理解できる。

『人生と文学』（警醒社、1910年5月）

『英国より祖国へ』（北文館、1911年12月）

『近代人の信仰』（警醒社書店、1913年6月）

『ロイド・ヂョールヂ』（前川文榮閣、1913年12月）

『近代文藝之背景 全』（教育講座、日本學術普及會、1914年12月）

『英國及英國人』（富山房、1914年11月 時事叢書第11編）

『白中黄記』（實業之日本社、1914年2月）

『人生日訓 全』（大日本圖書、1915年）

『ロイド・ヂョージ』（早稲田大學出版部、1919年4月 時局の生める四大人豪）

『リンコルン 全』（實業之日本社、1919年5月 英傑傳叢書第9編）

『国際聯盟』（早稲田大学出版部、1920年 世界改造叢書第9編）

『人生學』（教育研究會、1926年2月）

『リンカーン』（實業之日本社、1929年）³⁾

一方、竹中論文が指摘してるように、内ヶ崎は文明改造の第一歩は宗教の發達と純化（いか

2) 小野寺宏『内ヶ崎作三郎の足跡をたどる』（2007年、自費出版）。

3) CiNiiによる。ほかに、内ヶ崎の息子浩一郎著『ラスキン研究：その他』（1936年5月）もあるが、それは内ヶ崎作三郎による発行である。

なる国民であっても人生観、宇宙観を確立する必要があるため)、第二步は教育の改造としている。したがって、その『六合雑誌』寄稿論文のタイトルにしばしば「文明」や文化の言葉が見え、議論もつねに文化史や文明史の背景という大所高所からなされているのである。例えば、「カイゼルの政策とドイツの文化」、「バルカン戦争の文明史的意義」、「文明史眼に映る加州排日問題」、「文明審判者としての戦争」、「羅馬東京間大飛行の文化的意義」、「文明改造と女子高等教育」などがある。

筆者はここ数年、近代日本におけるリンカーン受容という研究テーマに取り組んでいる関係上、上記リストに挙げている内ヶ崎のリンカーン伝記、すなわち同じく実業之日本社から出た1919年初版と1929年改版の序文の異同に深い興味をもった。ここにおいて、その比較検討を通じて文化史家としての内ヶ崎のリンカーン論とその国際感覚を掴みたいと思う。

1 初版と改版の時代背景と序文における比較史論の展開

拙論“‘A Standard of Our Thought and Action’: Lincoln’s Reception in East Asia”と「近代日本におけるリンカーン物語の伝播——幕末明治期を中心に——」⁴⁾でも紹介したように、内ヶ崎は近代日本の代表的リンカーン伝記作家の一人である。初版の自序において、松村介石による先駆的伝記『阿伯拉罕倫古龍』（1890年初版、以降十数版を重ねた）より与えられた感動を次のように生き生きと記している。

嘗て十四五歳の頃、仙臺の一書店に於て、松村介石氏著倫古龍傳を求めて愛讀したことがあった。私は幼童時代より軍談本を漁り、殊に太閤記、三國誌の如き者は幾度となく繰り返して、豊太閤、劉玄德を以て理想の人物として崇拜してゐた。さてアブラハム・リンコルン傳を繙くに及びて、茲に新典型の偉人が目前に現出した。その微賤なる生ひ立ちや、苦學力行や、義侠心や、人道的政見や、殊に一死以て國難に殉したる壯烈なる最期や、相合して私の如き愚鈍なる少年をも感奮せしめずしては止まなかつた。少くとも一兩年の間私の心はこの新英雄を以て占領せられた。眞醇なる人生の標準が彼に於て私の爲めに確立せられた。何等の感激なかりし青春時代の學窓の下にありて、一道の光明となりて私の眠れる心を照したるものはアブラハム・リンコルンであつた。彼は私そして、今日に至る迄、人生の馳場を走らしめたる鞭撻者の一人である。私は天下の多くの青年と共に彼を一恩人として追想するに躊躇しない。

4) 前者はRichard Carwardine, Jay Sexton 編 *The Global Lincoln* (Oxford University Press, 2011)、後者は関西大学『中国文学会紀要』第35号所収。

リンカーンを豊臣秀吉や劉備とは違う新しいタイプの偉人、己の向上心を絶えず励ましてくれる鞭撻者と恩人と見なしたという内ヶ崎の考え方は、言うまでもなく、「立身出世」を求め、人格の「修養」を重視する同時代の青年たちに共有されていたと言えよう。

そして、伝記に関する直接的執筆動機は次のように紹介されている。初版について、松村著伝記と邂逅して「爾來二十餘年の間、機會あらばこの恩人の傳記を公にせんとする希望を懐いてゐたが、幸に數年前實業之日本社の依頼を受けたるが故に、私は之を快諾した」と、改版については、初版刊行後「度々リンカーン伝の改版を出したいと企てたが、多忙にまぎれて之を果たせなかった。然るに大正十二年九月の関東の大震大火の為にリンカーンの紙型も烏有に帰して了った。そして初版は絶版となった。古本屋にさへも容易に見付からなくなった。かうなると、注文は或は端書に、或は書面で、或は電話で、著者に対して発行所を知らせよ、残本があらば譲れとか申し込んで来る。一々断るも面倒であるから、そのうち改定版を出すからと豫報して置いた」と述べられている。

ただし、注目すべきは、文明史家としての内ヶ崎は「リンカーンを所謂立志伝中の代表者として書いたのではない」と己の創作意図を明言し、「彼は運命の人である。世間並みの成功者として取扱ふには余りに大きい、高い、そして深いものがある」ため、「近代世界史の大波動の一つとして」見た場合、「リンカーンの生涯は意義に富む」ということがはじめて理解できると、リンカーンをより大きな歴史背景の中で位置付けて評価しようとしたことである。

例えば、初版の序は「一九一九年春三月、巴里に於ける講和會議に神往しつゝ」で締めくくられていることよりも分かるように、執筆に要した「前後三年の星霜」は、まさに第一次世界大戦の後半とパリ講和會議の準備期間にあたる歳月であった。

私は世界的戦亂の進行につれ、本書中の南北戦争の経過を懐想して一種の感興を覺えた。北軍の連戦連敗は西部戰場に於ける聯合軍の戦果と類似してゐるではないか。南軍は獨逸軍の如く準備したる精銳、北軍は俄かに驅り集められたる烏合の衆ではなかつたか。しかも百戦百敗して、理想と信念愈高遠にして、終局の勝利を疑はなかつた大統領リンコルンの態度は、聯合軍の領袖クイルソン、ロイド・ヂョージ、クレマンソー等のそれと相似するでないか。最後に大元帥フォッシュ將軍の巧妙なる策戦はグラント將軍の神謀鬼策を聯想せしむるものがある。要するに南北戦争は世界大戦亂の一幅の縮圖であつた、豫想圖であつた。私が聯合軍の最終の捷利を疑はなかつたのは、多くの原因あれども、南北戦争の教訓に負ふ所を明記せねばならぬ。

ここでは、内ヶ崎は進行中の世界大戦の行方を、南北戦争の帰趨に重ね合わせて観察し、高遠な「理想と信念」を有した側は、たとえ装備が不十分で一時的劣勢に立たされても最終の勝利を収める公算がより大きいと見ていた。

もし、これをいわば二つの歴史事件に関する「教訓を汲み取る」型の「縦の比較」と見るならば、改版においては、同時代に起きた複数の歴史事件に関する「波長の合う」型の「横の比較」が行われているのである。なぜならば、「史癖を有する」内ヶ崎は、次のように「世界史には時代を同じくして共鳴するものがある」と考えていたからである。

リンカーンは米国の国歩艱難の秋に生まれて、尊き犠牲となった。南北戦争の犠牲者は数十万に達した。而も我が国に於いては幕府の威令地を掃って消滅して内治外交に行詰り、開国進取と尊王攘夷とが衝突し、桜田の変、安政の獄、戊辰戦争の三部劇が演ぜられた。井伊直弼、佐久間象山、吉田松陰、横井小楠、西郷南州、大久保甲東等の横死とリンカーンのそれと相応ずる一脈の運命の存するやうに思はれる。

支那に於ては長髪賊の乱ありて清朝は正に鼎の軽重を問はれんとしたのである。その中心人物洪秀全も何処となく支那流のリンカーンらしい気もするやうである。

欧州大陸に於てはプルシアの勃興あり、伊太利の統一が行はれた。

南北戦争、幕末維新、太平天国の乱、プロイセンの勃興およびイタリアの統一などはここにおいて、世界史の転換期に起きたある種の通底した類似性を有する大事件と受け止められているようである。しかし、内ヶ崎の縦横無尽の比較史論はここに止まらず、さらに米日間、日中間の憲政運動における直接的伝播性と相互的関連性に及んだのであった。

私は大正十三年の総選挙で衆議院の末席を占むるに至った。そして我が国に於ける立憲政治の考察を試みた時端なくも間接にリンカーンに負ふ所あるを知った。薩長が徳川を倒すや第二の幕府たらんとする野心があったかも知れぬ。しかし慶応元年には南北戦争の結果として六百万の黒奴が米国に於いて解放せられたという報道が太平洋を越えて聞えた。大勢である。輿論である。かくして立憲政治の運動が擡頭したといふのである。

孫文の三民主義は漸く実を結んで国民政府が南京に成立した。民国一年以来北方軍閥の為に压迫せられた南方の新思想家は今や政権を掌中に収めてある。この運動には日本の憲政運動の影響は可なりに大きい。しかし孫文の民族主義、民権主義、民生主義なるものは嘗

彼が米国に学んだ時「人民の為に、人民に由れる、人民の政治」といふリンカーンの語に暗示をえたといはれてゐる。果して然らば死せるリンカーンは中華民国に復活したとも考へられる。

ここに言及された米日間の憲政運動の関連性は、上述の松村介石『阿伯拉罕倫古龍』や『大西郷とリンカーン』（池田俊彦著、鹿児島奨学会出版部、1948年）および幕末明治初期におけるジョセフ彦と木戸孝允・伊藤博文との交流に関する近盛晴嘉の研究によってある程度裏付けられている。これに対して、日中間の憲政運動の関連性は、孫文や宋教仁および蒋介石を首班とする初期の南京政府などに関する数多い研究によって一層実証されている。所論中の「薩長が徳川を倒すや第二の幕府たらんとする野心があったかも知れぬ」や「死せるリンカーンは中華民国に復活したとも考へられる」には、いずれも明治維新後に約六十年も続いていた薩長、とくに長州藩閥主導の専制政治に対する批判が含まれており、その民政党議員の立場の表明でもあったと考えられる。

さて、Abraham Lincoln という名前の訳し方について、松村による先駆的伝記『阿伯拉罕倫古龍』以降、松村自身による『アブラハム倫古龍伝』（1895年）、『アブラハムリンコロン伝』（1924年）という名前の部分的あるいは全部のカタカナ化も図られたほか、Lincoln という苗字はたいいてい「リンコロン」と呼ばれていたが、「リンコーン」、「リンカーン」という例外も現れ始めた。これについて、東大そしてイギリスで英文学を研究し、英語に自信がある早稲田大学教授の内ヶ崎は、初版序文の末尾において、次のように指摘している。「Abraham Lincoln は正當に發音すれば、エーブラハム・リンカーンと稱すべきである。（「リ」はLの音、「リ」はRの音）。然れども是れ餘りに異常にして、却って多く讀者に別人の感を與ふる恐れがある。故に通常の發音に従ひて、アブラハム・リンコロンと記した。願くは讀者の諒察を乞ふ」と、従来の訳し方に踏襲するという妥協的処置を取った理由を述べた。しかし、改版の1929年には、米国そして日本などにリンカーン生誕百二十周年祭のこともあり、すでに5年前の1924年にイギリスの劇作家ジョン・ドリングウォーター（John Drinkwater）の *Abraham Lincoln: a play* (Sidgwick & Jackson, 1922) が横山有策により新潮社の「海外文学新選6」として『エブラハム・リンカーン』に訳されているし、世間の一般人も「リンカーン」という訳名に慣れてきているため、内ヶ崎はその改訂版を『リンカーン』と名付けた。

しかし、ここにおいて見逃せないのは、やはり内ヶ崎のもっている鋭い時代感覚である。

リンカーンは古くして新しい。本年は誕生百二十周年祭が米国は愚か、東京に於ても行はれ

た。我等の敬愛する秩父宮殿下は妃殿下と共に御出席になって、市民大政治家といふ賛辞を賜った。リンカーン以後、米国の大統領には身を微賤より起こした人々が多い。昨年の選挙に勝ったフーヴァー大統領はカリフォルニアの鍛冶屋の子である。彼と戦って敗れたスミス君はニュー・ヨークの貧民窟に育った逆境児である。世界一の成金国、北米合衆国は此種の人物を好みて大統領に戴くは、リンカーンの遺風を追慕するためかも知れない。リンカーンの生まれた時代の米国、特に其田舎は無政府状態であった。無警察の有様であった。各人は自衛の力を持たねばならなかった。門閥何物ぞ、財産何物ぞ、実力ある者は自然に周囲の人々より尊重せられ推戴せられたのである。悪人原も思ふ存分に跋扈したが、善人も十分に伸びたのである。現代の米国にはリンカーンが現はれにくい。それだけ彼の追懐が大切である。

ここにおいて、マーク・トウェインらによる同名の共著小説に由来する「金ぴか時代」がもたらした拝金主義や政治腐敗の醜悪現象に対するその批判、および1928年に選出されたフーヴァー大統領および落選のスミスがともに労働階級や下層民の子という事実に見れたリンカーンの遺風を追慕したアメリカ国民の意志に対するその賛美がはっきりと表明されていると言える。

2 内ヶ崎の宗教観と政治姿勢

筆者はかつて、吉野の学生時代は明治中期に定着しはじめた西洋型教育システムの中で送られたとはいえ、出会った先生方から実に少なからず漢学の薫陶を受けた、というのは、それらの先生方の多くは幕末・明治初期に伝統的教養を身に付けていたからであると論じたことがある⁵⁾。その中で、とくに安政年間生まれの海老名の漢学素養は深いものがあった。筑後柳河藩の武士の子として生まれた海老名は、少年時代に藩校伝習館で漢学を稽古し、1872年十六歳の時、「四書二経、左伝史記、綱鑑通鑑」を内容とする入学試験をへて熊本洋学校に入った。ここで、週日は米人教師ジェーンズによる自然科学や西洋史関係の授業を、週末は横井小楠の学流を汲む実学党の儒学講義を受けた。そして、明治9年1月についてジェーンズの人格教育と聖書講義に感化され「熊本バンド」の一員となった。

己の入信の契機について、海老名は次のように述べている。

『近思録』に、「君子は、当に終日天に在るに対すべし」と記してある。他の所には、「敬せ

5) 陶徳民「吉野作造の民本主義における儒教的言説——人間論と政治論を中心に——」、関西大学『東アジア文化交渉研究』第3号（2010年3月）。

ざる勿れ。以て、上帝に対すべし」とも記さる。天を上帝と云へば、考方が具体的になる。『論語』に曰く、「罪を天に獲れば禱る所なし」と。横井小楠は、「宋の朱子」から出発して、「四書」に遡り更に「五経」に至つて、遂に天に到達した。天を、上帝に人格化し、天が我が心を見、天が我を保護する。『書経』に、「天の明命を顧る」とある。小楠曰く、「堯舜三代の心を用うるを見るに、其天を畏ること、現在天帝の上に在せる如く、目に視、耳に聞く。動容周旋、総て天帝の命を受くる如く、自然に敬畏なり」云々と。予をして、天に向はしむる指南となつた。(中略) 予は常に良心の責めを受けて、解決し得ない窮境にあつた。予は先づ実学の力を得て、精神の活路を開発して行つた。⁶⁾

吉野および海老名の儒教の教養に関する以上の論述と引用は、彼より一歳年上の内ヶ崎の場合にもほぼあてはまるだろうと考えられる。竹中論文を踏まえた中村勝範の所論によれば、内ヶ崎が信仰したユニテリアン (Unitarian) とは、キリスト教正統派の中心教義である父と子と聖霊の三位一体 (Trinity) の信条に反対し、神の単一性 (Unity) を主張、イエスは神でないとする一派の人びとをいう。内ヶ崎の基督論は、「イエスは、神であり、救主である」という正統的信仰の立場はとらず、ナザレのイエスという歴史的人物として把握される。その意味は、イエスは大人格者であり、その感化と教訓により基督教という霊的運動がはじめられたとみなす。人間は大人格者であるイエスを指標とし、彼に従って歩むとき、利己心を抑えることができ、その点でイエスは救主である、という。1919年6月5日黎明会第五回講演会で行われた「人生観上の保守自由二派の対立」と題する内ヶ崎の講演は、前述のユニテリアン派としての立場からなされている。つまり、基督は、人間が「泥田へでも陥って困って居るのを上の方に引張って上げて呉れるような」、基督教正統派が用いている「救主」ではなく、「人生の鞭撻者であり刺戟者」である。基督は、釈迦、孔子、ソクラテスと共に人間を鼓舞してくれる、という。この基督観は、彼の人間観をも左右する。すなわち、人間は、神の協力者であり、人間が働かなければ神の事業は進まない、人間は決して神の奴隷ではない、というこのことは、神は絶対者ではない、人間は神の前に身動きできないものではなく、神の事業に協力する歓喜を持つものという解釈が成り立つだろう。総じて内ヶ崎の基督教説は合理的である。元来、ユニテリアンは合理的科学的宗教である、と⁷⁾。

6) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』(龍吟社、1938年)、90-91頁。

7) 中村勝範「激動の時代」と黎明会」、慶應義塾大学『法学研究 法律・政治・社会』第62号、1989年4月。中村は、同講演会の十日ほど前に床次竹二郎内相がその招待を受けた三教代表者に国民指導上の意見を聴取したことが内ヶ崎の所論の刺戟となったと指摘している。事実、1912年1月当時はまだ内務次官であった床次の主導による神仏耶「三教会同」があったが、その際に内ヶ崎は、すでに『近代人の信仰』と

内ヶ崎のこの基督観と人間観は、海老名のそれと同じように、儒教の「天人合一」論に通じる側面を少なからず有していると言える。なぜならば、儒教における天人関係は、天は人間を含む万物の創造神・主宰神の性格があるものの、その万物に対する「化育」は行き届かないところがあるため、人間の「賛参」や「裁成輔相」(=協力・協働)を待たねばならず、反面、人間の「賛参」や「裁成輔相」はあくまで天の道理に則って行われるものであって、天を無視した勝手な処置ではない、というものだからである⁸⁾。

先述で紹介した内ヶ崎のリンカーン論に現れた文化史観は、したがって、様々な歴史事件を、神の意思を汲み取って、文明発達の流れに沿った人間の活動の展開として捉えて合理化しようとしたという楽観主義的側面をもっているように見える。

にもかかわらず、一見リンカーンの賛美者と見なされている伝記作家の内ヶ崎は、「帝国憲法」発布30周年を迎えて書いた「民本主義の教育的宗教的社会的基礎」(1919年『六合雑誌』458号)において、ゲティスバーグ演説で訴えられた民主主義の原理に必ずしも完全に賛同しないという立場を表明している。すなわち彼は民本主義と乱民主義を区別し、「真正なる民本主義はあらゆる人をして、最高品性を發揮せしめ、最高能力を發揮するに存する」と規定し、ただ単に民衆に自由を与えたら自動的に民本主義が形成されるものではないとしている。彼は、アブラハム・リンカーン「人民による、人民のための、人民の政治」という民本主義の定義よりも、イタリアの建国三傑の一人としていわれているマッザーニーの言葉である「最善、最賢の人士の指導の下に一切人民に依って一切人民の進歩」という表現に賛成をする。すべての人を画一的に同一化するのではなく、それだけの人の個性を尊重して、あらゆる人の最高品性を發揮させることをもって、民本主義の目標とする。民本主義が乱民主義に陥らないためには教育が必要であるとする。「教育なきデモクラシーはモブクラシーとなる杞憂なしに非ず」という持論を展開している⁹⁾。

そして、己の親友で大正民本主義の旗手である吉野とも一線を画した立場を守っている。すなわち吉野逝去の1933年3月の二か月後に『中央公論』に発表した「吉野作造君と私」論説において、内ヶ崎は次のように両者の立場の異同を打ち明けている。

大正十三年頃から〔吉野君とは〕政治的には行き方を異にするに至った。私は既成政党に、

いう著書において西園寺首相・原内相および床次の開明的宗教政策を高く評価していた。これについて、拙著『西教東漸と中日事情——拝礼・尊厳・信念をめぐる文化交渉』(関西大学東西学術研究所研究叢刊57、関西大学出版部、2019年3月)第七章を参照されたい。

8) 陶徳民『懐徳堂朱子学の研究』(大阪大学出版会、1994年3月)、40-42頁。

9) 同注1、竹中論文、13頁。

吉野君は社民党創立の黒幕となった。これには思想的宗教的気分の背景もあったであらう。私は永井柳太郎君の後釜となって明治四十一年から四十四年末で三年間オックスフォードのマンチェスター学院に於て、宗教学、倫理学、社会問題、英文学、特に文化史の研鑽に専念した。私は『如何なる迷信にも幾分の真理が潜み、如何なる信仰にも若干の迷信が隠れてゐる』といふ宗教学上の公理を堅く握るに至った。絶対の真理はない。凡てが真理現実の過程にあるといふ信念である。この信念に基いて私は寛容を以て現在の社会制度に対し、希望を以て人類の将来を見通し得る条件付の楽観論者となった。これが私をして現在の所謂既成政党の中に止らしめてゐる中正穩健なる思想上の立場である。

吉野君は新神学運動から欧洲大戦乱前後のデモクラシー運動に突撃した。過去を顧みざる自由主義者であった。私は之と類似してゐるが、過去を顧みつつ、その中に有する一切の真善美を掴みつつ、将来の理想を撰取しつつ、現在を整理してゆくといふ立場を取るに至つたのである。¹⁰⁾

過激な主張やロマンチックな理想主義に走らず、現実を直視し必要に応じてそれと妥協することをも惜しまないという中正穩健の方針を取り、社会を進歩な方向に徐々に導こうとする内ヶ崎の一貫した思想上の立場がここにおいて明らかになっていると言える。

3 おわりに

中正穩健の方針に関する内ヶ崎の告白はしかし、決して都合のよい自己標榜ではなく、それは確かに左右の両極端を敬遠すると同時に、あらゆる有益な思想的要素を取り入れ、また必要上の他者批判と自己批判も辞さないという包容力豊かで公正性と公平性を保っているものであった。

例えば、第一次世界大戦後に誕生した国際聯盟について、内ヶ崎はその成立を歓迎しながらも、その規約に明文化されていない重要な問題をあげている。(一)人種差別撤廃、(二)信仰布教の自由、(三)海洋の自由、(四)関税の撤廃と自由貿易、(五)門戸開放、機会均等、などである(『六合雑誌』第461号)。そして、パリで開かれた講和会議において、日本の委員の提出した人種差別撤廃案が否決されたことをめぐり、人種差別を内包する限り、国際連盟は英米專横のそしりを免れ得ずと批判すると同時に、わが国は、外に朝鮮問題、内に被差別部落の問題を有

10) 同注2、小野寺宏『内ヶ崎作三郎の足跡をたどる』、1083頁。

し、自ら反省してあたるべきことを政府と国民に勧めている¹¹⁾。一方、上記の『国際聯盟』の序文において、「聯盟規約の制定は世界大戦の所産にして近代文明の新紀元を劃する大事件であり、現行の国際聯盟も将来はより完全なるものとなりて、国際間の義務、幸福、友情を保障し、且つ増進し得る、最も信頼し得べき機関となるべきを疑はない。要するに、国際聯盟は現代文明の象徴である。万事が世界的関係を有するに至りたることを証明する一大現象である。単に政治のみに止らず、経済も法律も、宗教も、教育も、芸術も悉く世界化せんとする新傾向の発露である」と、また最後の第十章「将来の展望」で「世界的識見、世界的観察、世界的理想、世界的技倆、世界的事業、皆吾人日本の青年を待ち設けてある。確かに現代の一大靈感である。一大光明である。吾人は感激の態度を以て之に向はねばならぬ」と、若者に真摯に呼びかけ、熱烈に励ました¹²⁾。

また、1920年代において現状を打破し変革を求めた若者、とくに帝国大学の青年学生の中で人気を博したマルクス主義という過激思想についても一概排斥の態度を取らなかった。すなわち1929年2月26日の「治安維持法中改正の件」審議の際、横山警保局長との問答の中では、作三郎は次のように述べている。「兎に角吾々サヘモ議会政治ト云フモノハ、モウ少シ何トカシナケレバナラヌト思ツテ居ル、サウスルト是ガ改革ヲ促進スル為ニハ、モウ少シ急進的ノ思想ガ一方ニナイト、是ハ矢張動カナイノデアリマス、今日ハ矢張現在ノ社会制度ニ或ル刺戟ヲ与ヘルモノガアルトスルナラバ——無産党ノ主張ハハ共産主義的ノ思想ハ、是ハ劇薬デアルカモ知レナイケレドモ、現状打破シテ幾ラカ現在ノ政界ヲ刷新スルヤウナーツノ有力ナル誘導カニナルノデハナイカト思フノデアリマスカラ、共産主義ヲ甚俣実行シヤウト云フコトニナレバ悪イケレドモ、共産主義ノ中ニハ、現在ノ日本ノ政治思想ニ有力ナル刺戟ヲ与ヘル要素ヲ含ンデ居ルト云フコトヲ認メルノデゴザイマスカラ、警保局ニ於カレテ思想ノ宣伝ハ程度良ク取締ル云フ御方針ハ宜シイコトト私ハ思フノデアリマス」と¹³⁾。周知のように、1925年に成立した「治安維持法」の本格的発動は、1928年3月15日、日本共産党関係者に対する全国一斉検挙であり、いわゆる「三・一五事件」であった。これと考え合わせると、約一年後に行われた同法改正に関する審議において、共産主義という劇薬にも現在日本の政治思想を刺激する有益な要素もっていると強調した内ヶ崎は相当勇敢なりベラリストと評価すべきであろうと考える。

同審議が行われた二か月後、内ヶ崎は改訂版の『リンカーン』を完成している。「昭和四年四月下旬 愛天閣書屋に於て」と締め括られた序文の末尾に、関連資料や挿絵などの提供で多大

11) 同注1、竹中論文、25頁。

12) 内ヶ崎『国際聯盟』（早稲田大学出版部「世界改造叢書第9編」、1920年）。

13) 同注2、小野寺宏『内ヶ崎作三郎の足跡をたどる』、1082頁。

な支援をしてくれた新渡戸稲造博士の言葉を引いている。「私の家の神棚には四個の偶像がある。ソクラテース、イエス、ジャン・ダーク及びリンカーンである」といはれた。味ふべき言である」と。こう考えると、審議の際の内ヶ崎の発言は、思想言論の自由を重んじるその一貫した信念の表明にほかならないと思えるのである。

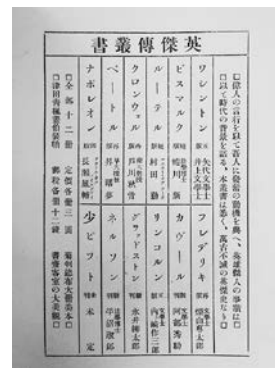
【付記】 本稿は、日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）（一般）「近代日本におけるリンカーン受容の研究——新聞雑誌・公文書・伝記・教科書などを素材に」（研究代表者 陶徳民 課題番号15K02880）による研究成果の一部である。



内ヶ崎作三郎



1919年版伝記の扉



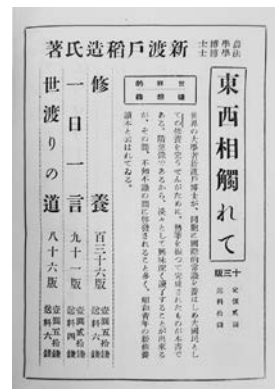
1919年版伝記所属のシリーズ



1929年版伝記のカバー



1929年版伝記の口絵



1929年版伝記に付載する広告

【謝辞】 上記の画像は、明星大学図書館「東京リンカーンセンター」所蔵コレクション中の内ヶ崎作三郎著伝記二冊によるものである。記して2018年8月24日から9月3日までの十日間にわたる資料調査について、多大な便宜をご提供下さった安岡雅子様をはじめ関係スタッフ各位に甚深の謝意を述べたいと思う。

